

「日本写真保存センター」調査活動報告(29)

写真の原点 肖像写真

松本 徳彦 (副会長)

2019 年は、フランスのルイ・ジャック・マンデ・ダゲールが 1839 年にダゲレオタイプを発明し、その技術が公認されてから 180 年になる。ルネッサンス以来、西欧の王侯貴族や富豪たちは、自分の肖像を画家や彫刻家に作らせて、その姿を絵画や彫像で永久に残そうとした。

19 世紀になって写真術が誕生し、瞬時に風貌を写し撮る新しい技術に関心が強まる。しかし、発明当時の撮影料金は相当に高価で、しかも露出時間が長く、直射日光下でも撮影に 10 分から 20 分かかるといったことから、さほど普及しなかった。その後レンズやカメラ、感光材料の開発が進み、写真が記録メディアとして有用であると認知され、写真家も増え料金も廉価となって、一般大衆に受け入れられるようになったことで、誰もが容姿を撮っておこうと、ポートレートスタジオに足を運んだ。さらに印刷媒体の発達が拍車をかけ、人物写真への関心が拡大した。

写真の記録性の活用は人類の歴史遺産である古代遺跡の発掘調査をはじめ、産業や科学分野、交通手段、国土開発の分野へと利活用が急速に進む。戦争や軍事目的への活用、日常生活での利用へと拡大。20 世紀に入ると富裕層の一部にアマチュア写真愛好家が生まれ、写真の大衆化がますます広がる。

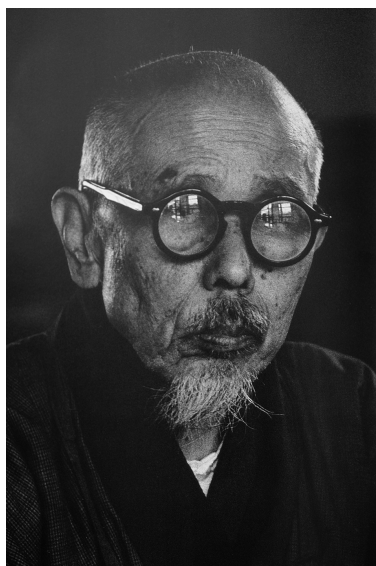
わが国では戦後になって写真文化が普及し、高性能なカメラが次々と開発され、印刷文化の発達とともに、カメラの大衆化と愛好家の増大で写真業界は大いに潤った時代もあったが、バブル経済の崩壊と携帯電話、タブレットなど通信機器の普及が女性やお年寄りまでに浸透し、写す、すぐ見られるという便利さが受けて、誰もが写せる、利用する総カメラマン時代が到来している。

■生涯を肖像写真に心血を注いだ片山摂三 (1914 ~ 2005)

福岡市の中心部天神にほど近い中央区役所そばに、潇洒な洋風スタジオがある。片山摂三は 1912 (大正元年) から続く老舗の営業写真館を継承し、戦後は、家業の営業写真活動だけでなく、昭和を代表する文化人を撮り続けながら、福岡の名刹観世音寺や大分臼杵の石

仏の記録、さらに 54 (昭和 29) 年には沖ノ島遺跡 (宗像神社沖津宮祭祀遺跡) の第一次調査団に加わり撮影をするなど、端正な仕事振りが評価されて貴重な作品を数多く残している。

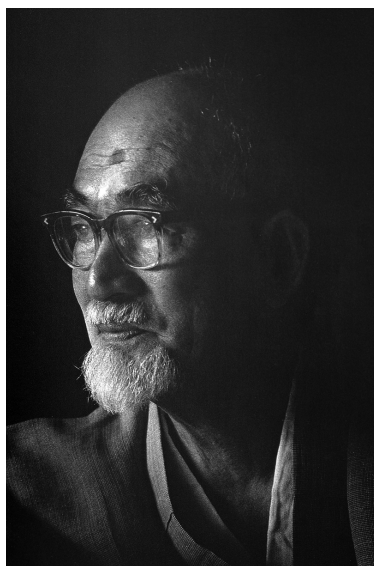
2018 年暮れにご遺族からの依頼で、氏が撮影されてきた数々の文人、画家などの文化人の肖像写真と九州の文化遺産を記録した写真原板の長期保存について相談を受け、収集保存に伺った。片山さんが長年使ってい



坂本繁二郎 1946 年



巖本真理 1948 年



志賀直哉 1961 年

た居室兼応接室で、原板を収めたロッカーに整理された原板や資料を拝見し、原板の良好な保存状況を確認した。さらに棚には中性紙のストレージボックスに収められたプリントを検分。なかでも人物撮影の基本となる肖像描写と、卓越した技術による金調色された全紙大の珠玉の肖像写真 106 点とガラス乾板とフィルムを収集することができた。

片山さんは 1914 (大正 3) 年シベリア・ブラゴエシチエンスクで生まれる。21 (大正 10) 年、母から中国の詩人陶淵明の話聞く。24 (大正 13) 年、旧明善中学の北村剛介先生から漢文の手ほどきを受け、陶淵明の「帰去来辞」を読む。29 (昭和 4) 年、シベリアで父が他界する。32 (昭和 7) 年、正田晴久氏の元で写真技術を習得。35 (昭和 10) 年、21 歳で営業写真の道に入る。戦時中は営業写真の傍ら、「日本写真サロン」や「日本写真美術展」、「国際写真サロン」などに応募し入選を続ける。45 (昭和 20) 年、終戦後は専ら観世音寺の仏像や坂本繁二郎画伯をはじめとする画家や文士などを撮影。写真展に応募し入賞を果たすなど精力的に活動を続ける。

人物撮影は撮影する人物を観察するところから始まる。撮影者が人物(被写体)そのままを写すのではなく、自分のイメージをその人物を通して創造する眼を必要とする。そこには当然ながら写す人の好みや感動、感情が表出してくる。被写体の表情や仕草だけでなく、写される人物の生い立ちや豊富な人生経験から浮かび上がってくる風姿や細やかな動作も見逃さない鋭い眼力が

必要である。

次いで、撮る場所も大事である。イメージした雰囲気を壊さない、きめ細かな配慮と、採光が大事である。明るい背景は心温まる雰囲気を醸し出し、適度な暗さも必要、落ち着いた描写には欠かせない。何しろ写される人物の内的な心象をどう掴むか。表情豊かな瞬間をとらえるには、できれば傍で対話してくださる人がいると自然な表情が狙える。などなど人物表現の極意が滲み出ている。

とくに大型カメラで撮るときは、相手も緊張し硬い表情となることが多い。リラックスした表情は小型カメラで軽快な瞬間描写に心がける。自然さは何といっても自然光に勝るものはない。瞳にキャッチライトがあるかないかで、印象が大きく変わる。見つめる目の方向、目線、顔の向きで何を物語っているかが変化する。

片山さんの肖像写真には、人物撮影のいろはがすべて活用されていて、個性豊かな文化人の際立った表情に、氏の観察眼の鋭さを感じる。穏やかな印象でありながら、実に多彩な肖像の描写が氏の心象として表出していた。

主な肖像人物を列举すると、坂本繁二郎(1946 年撮影)、巖本真理(48 年)、山田耕筰(57 年)、柳宗悦(60 年)、志賀直哉(61 年)、梅原龍三郎、奥村土牛、鐙木清方、小林秀雄、鈴木大拙、平櫛田中、三岸節子(以上 62 年)、朝倉文夫、熊谷守一、東郷青児、片岡球子(以上 63 年)、白洲正子(77 年)、草野心平(78 年)、井上靖(84 年)などとキリがない。人物を撮るために私費でそれぞれの家を訪ねて撮影したという。

■日本写真保存センター 御徒町分室で整理作業を始める

2019 年 1 月 10 日、日本写真保存センターは、写真原板の収集保存を行っている作業事務所(分室)を、JR 山手線の御徒町駅から約 10 分の場所(台東区台東 3 丁目 16 番地 5 号の 11 階建てのミハマビル 5 階)に移しました。エレベーターを降り、ドアを開けると応接を兼ねたギャラリーがあり、センターが収集している作品による写真展(約 20 点)が開催されています。次の作業室では調査員による写真原板の整理作業が行われています。

保存センターが収蔵している原板は、明治末期から 1970 年代に撮影されたガラス乾板とフィルム類で約 30 万点にのぼります。作品の内容は大正ロマンが漂う家族写真から、昭和初期のモガモゴ時代の若者たち。戦火の響き、軍事色に染まっていく日本。軍事訓練から空襲そして原爆の惨禍、敗戦と揺れ動いた激動の時代を捉えた作品など。ギャラリーではこの約百年間の日本人の姿、暮らしを捉えた種々の写真を、年 4 回順次入れ替え展示します。近現代の暮らしの諸相を反映する写真でアーカイブを構成しています。(記・撮影/松本徳彦)

